

17 - 18 世紀ドイツ知識人世界の一側面

Augustinus Hubertus Laeven, *The »Acta Eruditorum« under the editorship of Otto Mencke(1644-1707) の 議論をめぐって*

吉田 耕太郎

17-18 世紀の思想史研究を行う者には共有できる実感であろうが、たいてい考察する思想家たちの背景にはたいてい、かれらの生きていた世界として、「文芸的共和国」*respublica litteraria* と呼ばれる知識人世界が浮かび上がってくる。より具体的に言うならば、それは、全ヨーロッパに広がる知識人ネットワークである¹。

本稿で中心的に扱うのは、中部ヨーロッパの大学都市ライプチヒで1682年に出版された学術雑誌 *Acta Eruditorum* (以下、『アクタ』と呼ぶ)²と、この雑誌を中心に形成された知識人集団である。学術雑誌が知識人世界を結びつける重要な手段の一つであったことは、よく知られた事実である。この種の学術雑誌を通して当時の知識人世界に光を当てる研究は、今では珍しくはない。例えばオランダのピエール・バールに関する

る研究を挙げてもいい。しかし、ここで扱う知識人世界とは、*Collectores Actorum Eruditorum Lipsiensium* と呼ばれた複数の知識人から形成される集団であって、ベールの場合のようなある一人の突出した知識人編集者に依拠するケースとは異なっている。またロンドン王立協会の機関紙になぞらえて、『アクタ』を知識人集団による会報と捉えるむきもあるかもしれないが、『アクタ』の編集陣は、アカデミーのように明確に組織づけられた知識人集団とも異なっていた。

ここでは『アクタ』についての既存のモノグラフィー³を利用しつつ、この中部ヨーロッパ・ライプチヒで形成された知識人世

学報』等と訳されることが多い。

³ ここで扱う研究書の正式タイトルは次の通り。Laeven, Augustinus Hubertus *The »Acta Eruditorum« under the editorship of Otto Mencke (1644-1707) - The history of an international learned journal between 1682 and 1707 - Translated from the Dutch edition by Lynne Richards* (APA-Holland University Press, 1990); 題名からも分かるように、原書はオランダ語のものであった。この論文執筆にあたっては、オランダ語版原書も参考にした。オランダ語タイトルは以下のとおりである。De "*Acta Eruditorum*". 1682-1707, onder redactie van Otto Mencke (1644-1707) - de geschiedenis van een internationaal geleerdenperiodiek tussen 1682 en 1707 (APA-Holland University Press, 1986)。なお見た目に煩雑ではあるが、当論文では[xx]としてこの英語版からの頁数を明記することにする。

¹ 知識人世界についての基本文献としては以下のものがある。Neumeister, Sebastian; Wiedemann, Conrad (hrsg.) *Res Publica Litteraria - die Institutionen der Gelehrsamkeit in der frühen Neuzeit* Teil I und II (Otto Harrassowitz, 1987); Bots, Hans »Die respublica litteraria. Wunschbild der europäischen Gelehrtenwelt« in *Grundriss der Geschichte der Philosophie - Die Philosophie des 17. Jahrhunderts* Band 1-1 (Schwabe & Co Ag Verlag, 1998) S.31-48; Bots, Hans; Waquet, Françoise *La republique des lettres* (De Boeck, 1997)。

² 『学術論叢』、『ライプチヒ学術論叢』、『ライプチヒ

界の特質を描き出したいと思う。このモノグラフィーは出版後すでに十年を経ているとはいえ、メディア史のメソッドを使った『アクタ』に関する包括的な研究書であり、ヨーロッパ知識人世界の研究にとって今なお重要な基礎研究であることには変わりがない。後半では、このモノグラフィーを補完するという意味で、ドイツ初期啓蒙運動をはじめとする大きな思想史コンテクストの中に、『アクタ』を位置づけてみようと思う。

*

多くの先行研究が指摘するように、当時の知識人社会において、書簡による情報交換は、知識人同士を結びつけるメディアとして中心的な役割を果たしていた[7-8]。ただし、手紙は、途中で写しを取られ、死後に書簡集として出版されるということはあるとしても、あくまで個人対個人のメディアである。かたや、出版産業は順調に成長を続け、知識の伝達媒体として中心的な役割を担うようになってきていた[9-13]。しかし、書物も、不安定な流通システムや価格という点で、まだ今日のようにアクセスが容易なものではなかった。

このような事情のなかで、初期の学術雑誌と呼ぶべきメディアが誕生した。当時の学術雑誌は、著名な知識人の書簡からの抜粋や、増え続ける新刊書の書評を掲載する、効率的な知識の伝達媒体であったのである。

『アクタ』に先立って1665年にパリで発刊された世界初の学術雑誌 *Journal des Sçavants* や、ロンドン王立協会の機関紙 *Philosophical Transactions* にもこうした共通性格を確認することができる。これらの学術雑誌の中で、抜きんでて多くの購読者を獲得していたのが、『アクタ』であった[21,86-87,195,202-210]。所蔵図書館の調査記録から、『アクタ』が広く全ヨーロッパの知識人に読まれていたことは明らかであり[114-117]、思想的に重要な多くの論考が掲載されていたことから、『アクタ』が質の高い学術雑誌と見られていただけでなく、研究成果を公表する好適な場であるという評価も得ていたことが伺える[145]。このような『アクタ』の高い声価は、大学都市であり、見本市の街であるライプチヒという地の利だけから説明できるわけではない。むしろ、当時ライプチヒ大学は、宗教改革後は、正統ルター派色の強い大学であった。例えばアルベルティ Alberti, Valentin⁴ によるプーフェンドルフの自然法に対する批判や、ドイツ語による講義を行ったトマジウスへの批判・追放は、そこが旧態依然とした権威主義的雰囲気の色濃く残る大学であったことを意味している。そしてまた、当時のザクセンやその近隣の学生が、自然科学・数学を研究するために、イエーナ

⁴ *Cf. Jenkins, Robert C. *The Life of Valentin Alberti* (David Nutt, 1889).

大学や遠くオランダ・ライデン大学にまで足を運んだ事実は、ライプチヒ大学が数学・自然科学の分野では最先端の水準にあるという評価を得ていなかったことを示している。こうした雰囲気支配の中で、数学・自然科学を中心とする雑誌[53]⁵が自然発生的に発刊にいたることはないはずである。また、大学都市ライプチヒは、帝国内外の書籍商が一同に会す見本市の街[21-22]であったとしても、今日のような販売網や販売形態は存在しなかったため、それだけで、ヨーロッパ各地に散らばる読者に『アクタ』が頒布されることを必ずしも約束するわけではなかった。

*

『アクタ』が学術雑誌としての高い評価を維持するためには、その学際的な編集方針、質の高い原稿を提供し続ける執筆陣、高品質の印刷、さらにその広範囲にわたる頒布体制といった諸条件を満たすことが必要であった。それを可能にしたのが知識人集団の共同作業であり、また、執筆陣を束ねるに足る強力な結節点として働くある人物の存在であった。それが、編集責任者として手腕を振ったライプチヒ知識人、オットー・メンケ Mencke, Otto である。

メンケの略歴を確認しておこう[28-40]。

1644 年にオルデンプルグの繊維取引商に生まれたかれは、幼少の頃から父の仕事よりも勉学に興味を持つ。ブレーメンのギムナジウムを卒業後、ライプチヒ大学で、ライプニッツと同じくヤコブ・トマジウス(クリスチャン・トマジウスの父)のもとで哲学を、その後イエーナ、ヴィッテンベルグで神学、法学を修め、1669 年、25 歳でライプチヒ大学哲学科教授になった L. Otto Menckenius, Oldenb. Moral. Prof. Publ.⁶。かれの学者としての影響力は、五回も学長に選任されたことから伺える。かれは、法学部の反対を押し切ってトマジウスの著作に基づいた法学講義も断行している。かれのこうしたキャリア、そして権威(かれの妻はザクセン宮廷の顧問官ベルリキウス Berlichius, Burkhard の娘であった)と革新性が、『アクタ』の編集に大きく作用したことは想像に難くない。

もっとも、『アクタ』は、神学・法学・医学(物理学)・数学・歴史(地理学)・哲学(文献学)という多様な知を扱う雑誌であった。その執筆・編集作業は、哲学者メンケー一人の力では不十分であり、多くの執筆協力者が必要であった。メンケは、ライプチヒに既に存在した「コレギウム」を利用することで、多岐に渡る分野の専門

⁵ “...wir so wol neue experimenta undt observationes in re Mathematica, Physica, Medica anführen, also auch recensum novorum librorum von anno 1681 an, auf die art wie im frantzösischen undt römischen journals geschieht, vorstellen wollen.” Mencke to Leibniz 26(5).10(11).1681 in *Leibniz*

Sämtliche Schriften und Briefe I-3 N.438 (Akademie Verlag).

⁶ *Das ietzelebende Leipzig* (reprint, Schmidt-Romhild Verlag, 1994), S.9

家を擁する編集体制を確立した[22-26]。

「コレギウム」は、大学のカレッジとは異なる、今日では忘れ去れた知識人交流の一形態である。定期的な集会である特定のテーマについての議論が行われていた。こうしたコレギウムは、ライプチヒに限らず、帝国内の他の都市にも存在が確認されている。

ライプニッツに宛てられた手紙から、その出発時の編集メンバーには、数学者プファウツ Pfautz, Chrsitoph をはじめ、物理学教授キプリアン Cyprian, Johann、神学教授レッヒエンベルグ Rechenberg, Adam、そして先述のアルベルティが含まれていたことが確認できる[44-45]。かれらはすべてライプチヒ大学の教授であったが、何よりも重要なのは、アルベルティに代表される旧来の権威がメンバーの一員として含まれていたことである。このような新旧取り混ぜた形でのメンバー構成を可能にしたのは、メーンケの政治・交渉能力であっただろう。

編集協力者は、ライプチヒの知識人だけに留まってはいない。『アクタ』の編集作業の背景には、知識人世界の主要伝達手段である書簡を使った国際的な知識人ネットワークがあったのである。そしてこのネットワークのハブ的役割を果たしたのがメーンケであった。

国外の最新知識をいち早く入手するため

には、国外との直接の情報網[153]が求められた。『アクタ』発刊に先立つ1680年、将来の編集メンバーの一人でもある数学者プファウツと共にメーンケは、オランダおよびイギリスへの視察旅行を行っている[184,192]。この旅行は、オランダやイギリス発の知識を入手するためのパイプ作りであった[40-41]。とくにライプチヒ大学にも在籍していたユトレヒト在住の古典文献学者グラエヴィウス Graevius, Johannes Georgius の仲介により、オランダ・イギリスの知識人達とも容易に交流することが可能となった[151,161-162]。イギリスでは、例えばロバート・ボイルや数学者ジョン・ウォリスなどと面会している。ライプチヒ帰国後メーンケは、この旅行中に会った人々と文通を開始、旅行中に築いた関係を確固な情報網にするよう努めている。

地理的な条件で結びつきの薄かったイタリアについては、歩く百科事典と称されたフィレンツェの司書マグリアベッキ Magliabechi, Antonio の役割が大きい。かれとの関係は純粹に書簡を通じて築かれたものであったが、マグリアベッキはイタリアでの『アクタ』の普及に努めると同時に、イタリアから新刊本やら最新情報をメーンケに提供し続けた[111-113,177-180]。こうして形成された知識人のまとまりが、後々『アクタ』に記事を寄稿ないしは間接的に支援することになる。

こうした情報網構築が帝国内にも張りめぐらされていたことは言うまでもない。当時のドイツ知識人の中でもとくに重要な人物であったのが、ライプチヒ出身のライブニッツであった。メーンケに限らず当時のプロテスタント知識人にとって、カトリック圏、とくにフランス知識人とのつながりは稀であった。しかしパリ滞在の経験もあるライブニッツは、フランス知識人との強いつながりを持ち、さらに微分法の発見者の一人として知られているように、数学・自然科学分野の第一線で活躍している学者でもあった。ドイツ発の学術雑誌『アクタ』にとって、この情報の宝庫ライブニッツの論考は、他に代え難い価値を持っていた。事実ライブニッツは、メーンケの要請に応じて多くの記事（論文57・書評41）を『アクタ』上で発表することになる[42, 44-49, 52, 54, 109, 185-186]。また、ライブニッツの仲介によりベルヌーイ兄弟をはじめとする国外の数学者・自然科学者の協力も得られることになった[172-173]。

また『アクタ』に多くの記事を寄稿した官房主義でも有名なフォン・ゼッケンドルフ Seckendorf, Veit Ludwig von は、フランス語の知識を活かし、イエーナの神学者ブッデウス Buddeus, Johann Franz と協力してフランス語書籍の紹介に貢献した[187, 190]。そして国際的な情報網の確立に際しても、前述のグラエヴィウスを筆頭に、

ライプチヒ大学教授カルプツォフ Carpzov, Friedrich Bededikt 及びライプチヒ近郊ツヴィッカウの文献学者クリスチャン・ダウム Daum, Christian をはじめとするザクセン近隣知識人の積極的な協力があつた[160-168, 184]。『アクタ』刊行には、このような様々な知識人を経て形成された知識人ネットワークが必要不可欠であつたのである[168]。

そして『アクタ』の全ヨーロッパへの普及にも、メーンケを結節点とするこのネットワークが重要な役割を果たしていた。というのも、この知的なネットワークがそのまま『アクタ』の頒布網であつたからである。メーンケは、『アクタ』編集の資金として、途中中断があるものの、ザクセン宮廷から年200帝国ターラーを受取り[43, 119-123]、印刷代金に当てていた。メーンケは、刷り上がった雑誌を国内外の編集協力者や文通相手に自ら発送することになる。もちろん『アクタ』は、書籍商を通じて頒布されたが、その多くはメーンケ及びかれの書簡仲間を通じて配布された[97-98, 117-118, 126-127]。メーンケ自身の手により発送された『アクタ』の多くは、そのまま物々交換されることで、次に『アクタ』で紹介すべき新刊書籍としてメーンケの手元に戻って来たのである。

*

『アクタ』の学術雑誌としての高い評価の背景には、このような知識人ネットワー

クとあわせて、メーンケの個人的手腕もあった。宗教上の検閲問題を例に出すまでもなく、ある一つの立場や意見に加担することが、雑誌存続の障害になることを十分承知していたメーンケは、偏った立場の著作を扱わないよう注意している[77, 85, 96, 119]。さらに『アクタ』を個人的な中傷の場としないように、作成された記事にはその執筆者名は記載されず、また批判があった場合には、別刷りの小冊子で反論・弁護を行うという対策が講じられた[58-62, 80-83, 158, 162-165, 201]。かれは同時に印刷の質にも気を配っていた。『アクタ』には複雑な数学式や図版を多用した論文が多く掲載されたが、こうした図版や数式の印刷ミスは、雑誌の質を下げることにつながりかねなかったからである。高品質な印刷には予想以上の時間を要し、雑誌の発刊が遅れることもたびたびであった。こうした状況に対し、メーンケは図版や数式の量を減らすよう直接指示したこともある[62-71]。

*

こうした知識人世界に分け入る場合、膨大な資料（主に書簡等）を扱った緻密な実証を展開しない限り、空論に終始することは十分承知している。ここでは、問題を限定して、可能な範囲で、『アクタ』をとりまく思想的潮流を比較しておこう。『アクタ』を中心とした知識人集団は、ライプチヒ大学のコレギウムを基礎とし、さらに書

簡によって結びつけられた中部ヨーロッパを中心とするヨーロッパ大の共同体であった。しかしこの知識人ネットワークは、全ヨーロッパに存在していた他の多くの知的集団、知的潮流のうちのひとつであることを忘れてはいけない。それゆえ、これら異なる知的潮流と比較してみると、『アクタ』執筆陣の性格や傾向、そしてその限界が明確になる。他の知的潮流と言ったが、ここで取り上げるのは、通説トマジウスに発するドイツ啓蒙運動と、『アクタ』の筆頭協力者でもあったライプニッツによるアカデミー設立運動である。

大学講義そして学術雑誌のドイツ語化を推進し、ドイツ初期啓蒙運動の重要な担い手とみなされているトマジウスは、『アクタ』に対して批判的であった。かれは自らの雑誌の中で、『アクタ』執筆陣を銜学者 *Pedanten*、または皮肉を込めて「のらくらした奴ら *Gesellschaft der Musigen* 」と切り捨てる[7]⁷。かれの批判の背景にあるのは、民衆生活の（物質的・宗教的な意味での）改善を目的とした知の一般化、つまり大衆の啓蒙であった。啓蒙運動にとって、『アクタ』を支える目的理念は批判されるべき

⁷ *Pedantismusstreit* に関する包括的な研究としては以下のものがある。Grimm, Gunter E. *Literatur und Gelehrtentum in Deutschland* (Max Niemeyer Verlag, 1983); Kühlmann, Wilhelm *Gelehrtenrepublik und Fürstenstaat* (Max Niemeyer Verlag, 1982); 邦文研究としては以下のものを参照。西村稔『文士と官僚—ドイツ教養官僚の淵源』(木鐸社、1998)

ものであったのである。『アクタ』は、最新の専門知識を限られた知識人の中で共有することを目的としていた。そのために『アクタ』はラテン語で出版された[51-52,57]。フランス語や英語と異なり、ドイツ語は学術語としては国際的にまだ認められてはいなかった。『アクタ』で取り上げられたドイツ語書籍の統計にもドイツ語の当時の評価が現れている。ドイツ語書籍の割合は、ラテン語、フランス語、英語に次いでわずか3%に過ぎない[57-58]。つまりラテン語の使用は、『アクタ』が国際的な学術雑誌として受け入れられるための当然の選択であった。しかしこれは、最新の知はラテン語を理解する知識人の占有物であることを意味していた。実際、『アクタ』の主な執筆陣は、ライプチヒ大学と強いつながりを持つ大学知識人であり[44-45,137]、その読者もメーンケの書簡ネットワークで形成された知識人であったことは確認した通りである。『アクタ』の内容も、民衆への伝播を目的とするものではない。

こうした知識人集団の性格は、ルネサンスからの人文主義的伝統や汎知主義の伝統に由来する理念や役割から説明することもできるであろう。知の発展という共通の至高理念に支えられた文芸共和国の一員という意識をかれらは持っていたのであり、さらに信仰分離後は、地域統治者から自分たちを守るいわば知識人ギルドともなってい

た。『アクタ』の執筆集団は、このような文芸共和国のメンバーという意識を持っていた。ここには、当時起こりつつあった教養市民層とはまったく別の理念が働いていたことを忘れてはならない。

アクタ知識人の特権的かつ閉鎖的な性格は、アカデミーの構想と対比することでより明らかになる。中部ヨーロッパにおけるアカデミー設立史の中で主要な役割を果たしたのは、『アクタ』の筆頭協力者であったライプニッツ、そしてかれの友人であり同じく『アクタ』の協力者であったザクセン在住のチルンハウス Tschirnhaus, Ehrenfried Walter von である。アカデミー設立の知的コンテクストを再構成しよう。

ライプニッツは、アカデミーに実際に触れることになるバリ滞在以前から、幾度となくアカデミー設立を構想していた⁸。その際、常に中心となっていた課題は、知的発見を単なる興味本位のものに終わらせることなく、社会改善のための一技術として応用することであり、そのために信仰の区別や大学という枠組みを排除した知識交流の場を設立することであった⁹。こうした理念は、医者や役人、土木工事指揮者をはじめとするベルリンアカデミー参加者の多様な

⁸ ライプニッツとアカデミーの関係については以下の著作を参照。Brather, Hans-Stephan *Leibniz und seine Akademie* (Akademie Verlag, 1993).

⁹ vgl. Leibniz an Hofprediger Jablonski (26. März, 1700) in Brather, a. a. O., S.66-71.

顔ぶれとして実現することになる。チルンハウスによれば、アカデミーで求められるべき環境とは、知を一部の知識人が特権的に所有するものではなく、開かれた定期的な意見交換の可能な場であった¹⁰。チルンハウスが深く関与した現存するザクセンのガラス工芸やマイセン陶磁器などを見れば、今日の専門技術者のようなタイプの知識人の育成が、アカデミーにおいて求められていたことが分かる。

アカデミーに認められる応用への熱意と公開性は、旧来の書簡をベースに結びつけていた知の形態への批判という形で模索されたものであった。しかし、こうしたアカデミー設立という事実が、旧来の知的集団の閉鎖性や旧態依然とした態度への批判以上の問題を提起していることを見逃してはならない。

アカデミーが開放的な性格を有していたとしても、誰もが自由にアカデミーに参加できたわけではない。アカデミーに集う人々は所詮広義の知識人には違いなかった。例えば知的交流における大学や宗教の枠を批判していたライプニッツでさえも、知識をそのまま一般に開放することに危惧を表明していた。アカデミー設立が示すのは、知的状況の変化である。つまり、知識人集団に新しい形態・役割が与えられるように

なったということだ。

ベルリン・アカデミーは、新生プロイセン王国の一機関として設立された。アカデミー設立がこの新王国の権力誇示の一例として利用されたように、このアカデミーは、知識人の集団である以上に統治者の学術政策 *Wissenschaftspolitik* のうちに組み込まれた一機関であったのである。

学術政策の中に位置づけられると、知識人集団を取り巻く環境も変化する。統治者と知識人の関係は、対立的ではなく、かえって協働するようになる。例えばライプニッツのアカデミー構想においては、知的にも経済的にも立ち後れた中部ヨーロッパ地域の建て直しが重要な課題として受けとめられていた。つまり実践的な知を求めることは、地域（国）の発展に結びつくような具体的な技術の獲得を意味していた。つまり知が、学術政策を行う統治権力の増強に直結していたのである。事実ライプニッツが、アカデミー設立を説得する際に頻繁に使用した論点は、実践的な技術革新によってなす国力の増強であった¹¹。またアカデミーが有していた開放的な性格も、積極的な宗教寛容政策という実際の政策があって初めて可能になるものであった。アカデミーに参加した多くのフランス（系）知識人は、フランスからの宗教移民であるユグノー派

¹⁰ Vgl. Tschirnhaus an Leibniz, (13. Januar und 7. März 1693) in Gerhardt, C. I. (Hrsg.) *Der Briefwechsel von Gottfried Wilhelm Leibniz mit Mathematikern* (reprint, OLMS, 1987) S477, 480.

¹¹ Vgl. Leibniz' Memorandum für König Friedrich I. (Sommer 1702) in Brather, a. a. O., S.142-152.

およびそれに関係する人物であった¹²。このようなアカデミー設立は、学術政策に組み込まれた知識人集団の新たな役割を象徴するものである。カレンダーや辞書編纂といったアカデミー初期の仕事を、こうした論点から論じることとも可能であろう。

学術政策の中に位置づけられた知識人の新たな役割は、教育政策にも現れている。教育は、文芸共和国という理念によって結び付けられた知識人を作り出すことではなく、政治政策の一翼として押し進められた。教育と知識人の新しい役割を体現していたのが、ライプチヒと目と鼻の先にあるハレ大学である。ハレ大学も、プロイセンによって、1694年に旧来の制度を一掃して再設立された学術機関であった。そこでは、トマジウスをはじめヴォルフ、そして敬虔主義の重要な担い手であったフランケ Francke, August Hermann らの知識人らが、民衆の啓蒙という中心的理念の下で活躍した。ここで先のトマジウスによる批判が、別の形で結びつくことになる。ハレ大学は、既存の知的システムを採用せず、ドイツ語による講義を始め、敬虔主義に基づく新たな教育法を導入し、今日の経済学にあたるような実務的な新学科も設置した。啓蒙運

動と捉えられる一連のこうした教育政策は、絶対主義的統治の一股として働くエリート中間層の養成という別の意義を有していたのである。「(知識人の) その知性と意志が正当化されるのは、それが人類の共益のために利用される時」と説く、トマジウスの教育理念には、文字通り宗教的な幸福だけではなく「国の繁栄 Wohlseyn eines Staates」¹³も念頭におかれていた。こうしたトマジウスの哲学が、知識人集団の役割の変遷と結びついていることは言うまでもない。

*

ドイツ啓蒙という大きな思想的潮流のなかでみると、『アクタ』を発刊していた知識人集団は、中部ヨーロッパにおける中心的な役割を次第に失っていくことが分かる。こうした衰退は、直接にはメンケという求心力を失ったことに起因するが、そもそも文芸共和国という理念に基づいた共同作業が成立しなくなったこと、そして知識人の役割が変化したこともその要因である。

しかし、『アクタ』を中心に形成された知識人世界は、プロイセンに代表される次世代の知的形態とひきかえに消えていく古い形の知として片付けられるものではない。むしろこの知識人集団の特性を確認することが、つぎの時代に支配的になるプロイセ

¹² とくにベルリンアカデミーとユグノー派の関連については、Grau, Conrad »Die Berliner Akademie der Wissenschaften und die Hugenotten« in Bregulla, Gottfried (hrsg.) *Hugenotten in Berlin* (Union Verlag 1988) S.327-362.

¹³ Thomasius, Christian *Christian Thomasens Allerhand bissher publicirte Kleine Teutsche Schriften* (Halle, 1701) S

ンの知がはらむ問題、つまり知の背後に機能する権力と知の協働という側面を浮かび上がらせる一助となるのではないだろうか。

(よしだ こうたろう・東京外国語大学大学院博士前期課程)